# 日向の跡目

ユン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日向の跡目

【Ｎコード】
Ｎ４４８６Ｙ

【作者名】
ユン

【あらすじ】
車に追突され死亡した主人公。
前世の記憶を持ちながら、来世『ＮＡＲＵＴＯ』の世界で生活をしていく。

原作『ＮＡＲＵＴＯ』の設定を壊します。
それを許せる方はどうぞ！
※なお、この物語と平行して『日向の跡目（裏）』も更新していく

予定です。
良かったら両方読んでいいってください。
※上記にあたりＲＩＤＥ．２０で以降で二つの物語が一つになる予定になっています。その際、日向の視線から別の視線で書く予定になります。

※あくまで予定です。

## 始まり

今の私の名は…日向ヒナタ。
日向一族の当主・日向ヒアシの長女です。
え？今のってなんだ？ですか？
私はＮＡＲＵＴＯの世界に転生してしまいました。
前の名は…残念ながら忘れてしまいました。
え？何故転生したかですか？
それは…これからお話いたします。
では後ほどお会いしましょう。

コンビニでジャンプの新刊を立ち読みしてた。
ちょうどＮＡＲＵＴＯを読み終え次のマンガを読み始めた瞬間…目の前にコンビニに突っ込んできた大型トラックが…

気がついたら私は光の世界にいた。

＊「すまん！」
目の前に真っ白な服を着た人に土下座された。
私は意味不明だったので、現状をその人に聞いた。
＊「そ、その…手違いで其方を殺してしまった…すまん！」

手違いで私は殺された？
…良く読んでいた携帯二次小説みたいな事を…ってこの流れって…
まさか…ね？

頭の中でふた文字の漢字が浮かんだ。

＊「察しの通り！転生して生活して欲しい！」

あ？頭の中読まれた？
ってかこの人神様か…？
転生ね？どうせならＮＡＲＵＴＯの生活してみたいな…日向一族とか…ヒナタ…がいいなっとか言ってｗ

＊「其方…物分りよ過ぎだろ？…ＮＡＲＵＴＯで日向ヒナタに…？構わんぞ？他に欲しいものは？」

…また読まれた？
ん？他に欲しいもの？
…後払いで…欲しくなったら呼ぶとか無理？かな？

＊「後払いか…良いぞ！…じゃあ！早速…いってらっしゃい！」

そしてまた、光に包まれた。

っとまぁ…そんな感じで今に至る訳…因みに私は赤ちゃんから人生スタートしたんですよ？
ヒアシ様…父上の親バカ振りを…まさか…見れるとか…嬉しいです！
あの人も人の子ですから…ねｗ

まぁ…そんな感じで…宜しく！
って原作壊しとかしていい？
なんか…ヒナタメインの転生とか無いじゃん？
あれ？あったっけ？

まぁ…キャラ壊しになるんで…多分…だからそれ許せる人に宜しくね？w

## RIDE. 1　嫡子誕生！

今日、木の葉の隠れ里にある日向一族待望の嫡子が産まれた。
嫡子の名は…ヒナタ。

まぁ…私が産まれた訳ですね！
さて、では産まれた直ぐな訳ですのでやる事が無い。

って言うか、日向一族は感知タイプが沢山いるから隠れて修行とはいかないんだろうな…っと思っていたら眠気がきた。

あれから何時間？寝たのか分からないが、目が覚めたらお腹が空きた。
鳴き声一つで母上が来て、母乳を…。
お腹いっぱいになれば又眠気が…そんな繰り返しだった。

3ヶ月程その繰り返しを続けて…フっと思い、体全体に薄いチャクラを練ってみる。
なんか…微妙な感覚がした。

母上「ヒナターー？」
部屋の外から母上の声が聞こえた。
襖が開く前にチャクラを解き、何事もなかったかのように母上を見上げる。

ヒナタ「あぅ？」（なに？）

母上「ヒナタ…見て？新しい服を作りましたよ？」
ヒナタ「きゃあきゃあ」（やったぁ）
母上が手にしていたのは薄い桜色の赤ちゃん用の服だった。
母上「さぁ着てみようか？」
母上に抱き上げられながら私は母上が作った服を着た。

その後、父上やヒザシ叔父様、ネジ兄様が来られ、何か話していた。

（ネジの登場は原作では3才の誕生日だったかな？まぁ…良い…？
あれ？この時、ネジは1才か…）

ヒナタ「あぅ？」（あれ？）
父上「ん？ヒナタ、起きていたか？…こっちは私の弟・ヒザシとヒナタの1つ上のネジだ」
ヒザシ「兄さん…この間、紹介されましたよ」
父上「ん？そうだったか？…まぁ…ついだつい…」
ネジ「かぁいい」
父上やヒザシ叔父様の横にいたネジ兄様は小さく呟く。
その姿にヒザシ叔父様の顔が綻ぶ。
ヒザシ（ネジ…お前も可愛いぞ）
そんな感じで過ごした。

それから3ヶ月、薄いチャクラを練って体全体に覆う修行をしていた。
まぁ…父上や母上にバレないように気を付けていた。

1才になるまでに私はチャクラコントロールを仕上げた。
2才にはどんな修行をしていこうかな。

1才になってからは世話係　日向　コウと共に庭を走ったり、散歩をしたりした。
勿論、バレないように足に薄いチャクラを練って過ごした。

## RIDE・2　日向嫡子誘拐事件

3才の誕生日の日、雲隠れの里と同盟関係を結んだ木の葉隠れの里は浮かれていた。
ただ、日向　一族だけは嫡子…私の誕生日の為に浮かれてパレードとはいかなかった。

ヒナタ「父上、里は何故パレードなのですか？」
父上「ヒナタ、今日はお前の誕生日と重なり、諍いの耐えない木の葉と雲の同盟締結の為に遣わされた和平の信者が今、里に来ているんだよ」
ヒナタ「では良い事が今日あったのですね！」

私は父上を嬉しそうな顔で見上げているとヒザシ叔父様とネジ兄様が来られた。

ヒザシ「ヒナタ様も3つに…おめでとうございます」
ネジ「ヒナタ様、おめでとうございます」
ヒザシ叔父様とネジ兄様はお辞儀をしながら挨拶をした。

ヒナタ「ヒザシ叔父様、ネジ兄様、お忙しい中わざわざありがとうございます」
私は御礼の言葉とお辞儀を返した。
父上「ヒ、ヒナタ…ヒザシ、ネジ…わざわざすまなかった」
ヒザシ「え…あ…い、いえ」
父上とヒザシ叔父様は私の行動に焦っていたようだった。

その日、日向　一族の鉄の掟によりネジ兄様の額に”籠の中の鳥”を意味する呪印が刻まれた。

そして、一族の者が全て寝静まった宗家の家に忍び込む者がいた。
私は前世で知っていたので、皆にはバレないように分身の術をし庭に隠れていた。

数名の忍びがヒナタの分身を連れ、日向　一族の屋敷から立ち去る。
ヒナタはそれを身送り部屋の中に戻った。
分身は忍びが里と里の国境を向けた瞬間に消した。

翌日、父上だけにその事を伝えると驚いていた。
父上「ヒナタ、分身の術をいつから使っていた？」
ヒナタ「夕食が終わった後、お手洗いに行った時です、父上」
父上「…そうか、すまなかったな」
ヒナタ「いえ…もし私が誘拐され父上や他の日向の者が敵を殺してしまったら…何か嫌な事が起きると思ったので…」
父上「ヒナタ…ありがとう」
ヒナタ「いえ…私が勝手に行動しただけですから…父上、私はもっと日向の嫡子に担う人間になりたいです！なので、これから修行を宜しくお願いします」
私は父上の顔を真っ直ぐ見、決意をした。
父上「分かった」

それからは父上の元、修行をおこなっていった。

その様子を一部始終見ていた者がいたが…それは別の話…。

## RIDE・3　日向嫡子誘拐事件後

嫡子誘拐事件が無事終わり、日向　一族の元に三代目　火影が来られた。

火影「ヒアシ殿、雲隠れの者がここに忍びこんだとは誠か？」
ヒアシ「はい、火影様。私の娘…ヒナタが目撃しております」
火影「ほぉ…ヒナタが…話を聞きたい…呼んでくれるか？」
ヒアシ「っは！…ヒナタ！入って来なさい」
ヒナタ「はい！父上」
襖を開けてヒナタは火影、父上の前に座る。
火影「ヒナタ、昨晩雲隠れの者がここに忍びこんだのを目撃したのは誠か？」
ヒナタ「はい！火影様！私の分身が木の葉を抜け雲隠れに行った事に間違いありません！…屋敷から出る際に顔が少し見えました！」
火影「その顔が雲隠れの者だと？」
ヒナタ「はい！パレードを白眼で見た際にパレードに参加していた雲隠れの者に間違いありません！」
火影「な！誠か！…んむ…ヒナタ、ありがとう！下がって良いぞ！」
ヒナタ「っは！失礼いたします！」
私が部屋から出た後も、火影、父上は話をしていた。

話の内容は聞かなくても雲隠れの者の事に間違いないでしょう！

逃がしたのだから、処分とかまではいかないでしょう！

庭で瞑想しながら集中力でも溜めるべく、座禅を組んだ。

## RIDE. 4　たまには息抜きも

修行に明け暮れる毎日を過ごす日向　ヒナタこと…私は父上に「たまには息抜きも」っと言われ世話係　日向　コウと散歩中！

コウ「ヒナタ様？」
私が散歩中ずっと黙っていたからかコウは話しかけて来ました。
ヒナタ「ん？何？コウ？」
コウ「あ…いえ…どうかなされましたか？何か考えておられると思ったのですが？」
ヒナタ「ん？考え…いや…対した事では無いが、コウは年下の私に敬語だよね？…なんか淋しいなぁって思う」
コウ「え…すみません！…私はヒナタ様と違い分家の者ですので…」
ヒナタ「それが淋しい！」
コウ「し、しかしですね！ヒナタ様」
ヒナタ「コウは私が宗家だからといって…二人の時でも敬語ばかり！私は宗家とか分家とか正直…どうでもいい！…だって同じ一族じゃないか！コウは私が宗家だからと私と普通に話をしてくれないのか！」
私は初めて？コウを怒鳴った。
そして…その場から逃げた。
後ろからコウが呼ぶ声が聞こえたが、無視した。

どれくらい走ったのか日は夕暮れになっていた。
ヒザシ「ヒナタ様？」
後ろから声を掛けられ振り向くとヒザシ叔父様とネジ兄様、申し訳なさそうに下を向くコウが立っていた。
ヒナタ「ヒザシ叔父様！ネジ兄様に…コウ」

ヒザシ「ヒナタ様、話はコウから聞きました…ヒナタ様はお優しい方ですね？」
ヒナタ「ヒザシ叔父様…も父上の弟様で…分家とか…何故…敬語なのです？…そりゃあ…日向　一族は昔から名門とか言われ、格式とか他の一族とかより高いでしょう！…でも…私は…」
ヒザシ「ヒナタ様…ありがとうございます」
ヒナタ「え…」
ヒザシ「ヒナタ様はお優しい方…貴方を分家として守れるのです！私達分家にとっては嬉しいですよ…ヒナタ様の意見を心の中でしっかり覚えておきます」
ヒザシ叔父様はそう言い頭を下げた。
後ろの方で、ネジ兄様、コウも頭を下げていた。

ヒナタ「ヒザシ叔父様…頭を上げて…ごめんなさい…我儘言って」
ヒザシ「ヒナタ様はまだ３つ…我儘を言っても構いませんよ」
ヒナタ「ヒザシ叔父様…ありがとうございます」
私はとびっきり笑顔で御礼を述べた。

勿論、コウにも後から謝りました。

## ＲＩＤＥ．５　あの子の話

息抜きをしてから、ヒザシ叔父様とネジ兄様、コウとは又仲良く話すようになった。
ただ、不満は敬語を使われる事だけだった…。

コウ「ヒナタ様…お茶が入りました」
私は丸太を相手に柔掌を打ち込みながら考えているとコウが話し掛けた。
ヒナタ「コウ…ありがとうございます」
コウ「いえ…ヒナタ様？又何か考えておられると思ったのですが？」
ヒナタ「…昨日、夕暮れの散歩中に見掛けた…金髪の男の子…あの子は何故…避けられているの？」
コウ「…金髪の…あの子は…数年前になりますが…あるモノを封印されておりまして…それで…避けられています」
ヒナタ「あるモノ？…コウ…詳しく…は教えてくれなさそうね？…私はあの子と仲良くなりたい！」
コウ「ヒナタ様！」
ヒナタ「コウ？私が差別とか嫌いなのは…知っているわよね？…それにあの子…まだ私と同じ子ども…もし、私があの子の立場だったら、自害しても…コウは良いの？」
コウ「ヒナタ様…はぁ…分かりました…ですが…この事はヒアシ様にもお伝えします！…危険な事はしないで下さいね！」
ヒナタ「ありがとうございます…コウ…私は貴方が私の世話係で良かったです」
コウに向け優しく微笑んだ。

コウ「ヒナタ様／／／／／／」

コウは私が微笑んだのに照れたのはまた別の話。

## RIDE．6　あの子と

コウに連れられて散歩していると何やら騒がしい。
その場に行くと、数名の男の子たちに囲まれている金髪の男の子がいた。

コウ「ヒナタ様、危ない事はなさらないで下さいね！」
ヒナタ「コウ…分かっていますが、流石にアレは許せません！…アレはイジメではないですか！日向の者として一喝せねば…」
コウ「…ヒナタ様」
コウが私の行動を父上に伝え許可を得ていた。
ヒナタ「あのー！そのそこの人たち！何してらっしゃるんですか？」
私は囲まれている金髪の男の子に近づき話し掛けた。
男の子1「あぁ？…ってこの子！」
男の子2「日向の？」
ヒナタ「はい！私は日向　一族の者ですが、貴方たちは私の目の前で何しているんですか？…もしかしてその子をイジメてるとしたら、貴方たちにも同じ痛みを私の手で下さないといけませんね？」
私は男の子たちに向かって殺気を出す。

後ろからコウに小さく溜息されたが、私は私の目の前でイジメをしている彼等に一喝せねば気がすまなかった。
男の子1「あ…あの…日向の人たちに一喝されるのは…」
ヒナタ「自分がされて嫌な事をその子にしているのは貴方たちでしょ？私は貴方たちに同じ痛みをしないと分かりませんよ？…今後、その子に対しイジメしたら…どんな痛みをあげましょうか？」
男の子2「あ、謝ります！だから！」
ヒナタ「だから？何です？」
私は男の子たちに向かって殺気を立て続けた。

男の子1「見逃して下さい！」
ヒナタ「何故？見逃してやらないといけないのですか？…この間も見掛けましたが…その時は見逃してあげましたが？…2度ある事は3度あるって言葉は貴方たち知っていますか？…私は今貴方たちに痛みを与えると決めたので話し掛けたのです…容赦しません！」
私は構え
ヒナタ「守護八卦六十四掌！」
私は点穴を綺麗に決め、チャクラを練らせないようにした。

ヒナタ「サッサと目の前から消えなさい！」
男の子たちに向かって殺気を立てながら言い放った。
彼等は逃げるように走って行った。

コウ「ヒナタ様！何故、守護八卦六十四掌を！」
ヒナタ「ん？何か問題でも？」
コウ「あの技は…」
ヒナタ「コウ？それより彼の怪我を」
私は金髪の男の子の怪我を治療するようにコウに言い、男の子に話し掛けた。
ヒナタ「大丈夫ですか？」
男の子「はい…ありがとうございます」
ヒナタ「私は日向　一族の日向　ヒナタです！こっちは私の世話係　日向　コウと言います！宜しくお願いします」
男の子「…ナルト、うずまきナルトです」
ナルト君は小さい声で名前を言った。

その後、ナルト君を日向の屋敷に招き入れ父上に紹介した。

## RIDE．7　うずまきナルト

うずまきナルト君を日向の屋敷に招き入れ父上に紹介した後、私はナルト君と父上にある提案をした。
その為に三代目　火影様とヒザシ叔父様とネジ兄様を呼んだ。

ヒナタ「三代目　火影様わざわざありがとうございます！今回お呼びしたのはここにいるうずまきナルト君についてです！」
火影「ヒナタ、ナルトの事は…」
ヒナタ「火影様がナルト君の事をどれだけ知っているかは後ほどお聞きします！まずは私の提案を聞いて下さい！」
火影「…ヒナタは嫡子に相応しい子に育ったのぉ…ヒアシ殿」
父上「ありがとうございます…火影様」
ヒナタ「私はナルト君の苗字…うずまきっと言う一族を聞いた事がありませんでした。…しかし、ある一族の方にお聞きするとある方の名前を教えていただきました。…その方は、四代目火影・波風ミナト様の正妻・うずまきクシナ様」
そう言うと三代目　火影様と父上、ヒザシ叔父様の体がビクッとなったのを私は見逃さなかった。
ヒナタ「火影様、父上、ヒザシ叔父様は何か知っているのですね？」
私はそう言いながら話を続けた。
ヒナタ「父上、彼をうずまきナルト君を日向　一族で一緒に暮らしませんか？」
父上「ヒナタ、それは…」
ヒナタ「父上、何を恐れるのです？彼はナルト君は同じ木の葉隠れの里の人間です！仲間なのです！父上も日向　一族は木の葉にて最強っと言っていたではありませんか！…その日向　一族宗家当主が何を恐れるのです！」
私は父上の目を真っ直ぐ見て述べた。

父上は私の言葉を聞き、ナルト君を日向　一族で一緒に暮らす事を許可してくれた。

火影「では、ヒアシ殿、ヒナタ、ナルトを宜しくお願いします」
火影様は一礼したそして…
火影「ナルト、これからは日向　一族の屋敷で元気にのぉ…たまにはワシのトコに遊びに来いのぉ」
ナルト「はい！火影のじい様今までありがとうございました！」
ナルト君は火影様に一礼し、見送った。

## RIDE．8　うずまきナルト2

あの”うずまきナルト”が日向　一族に引き取られたと言う噂が里中に広まっていた。

ナルト「ヒナタさん？…なんで僕を…？」
ヒナタ「はぁ…先ほどから同じ質問ばかりですね？…良いですか？私はナルト君を私の一族で守りたいと言う事！そしてナルト君貴方の力をナルト君自身で制御させる為でもあります！」
ナルト「僕の力を僕自身で制御？って…やっぱ…僕…」
フイにナルト君は天を見上げた。

ヒナタ「はい！私はナルト君に修行をかせます！…ナルト君は又私に助けられたいですか？…弱いままで良いと思っていますか？…私は大人たちがナルト君の何を知って恐れているのかは知りませんが、ナルト君はナルト君です！ナルト君自身でそれに立ち向かわなければ…先はありませんよ！」
ナルト「強くなりたい！」
ヒナタ「では、ナルト君！私と一緒に修行をしましょう！」
ナルト「はい！」

それから毎日アカデミーに入学するまで修行をした。
勿論、ネジ兄様も一緒に…。

## ＲＩＤＥ．９　ナルト君の真実（簡単に）

ナルト君が日向の屋敷に来て３ヶ月が経った。
毎日、チャクラを練り、チャクラコントロールを実施していた。
ナルト「ヒナタさん、何回か分身したけど変な感じがします！」
ヒナタ「…もう一度チャクラを練ってみて下さい！…白眼！」
私は白眼でナルト君のチャクラの流れをみる。
ヒナタ「！？」
ナルト君のヘソ辺りから何か模様なモノが見えた気がした。
ヒナタ「…ナルト君」
ナルト「ヒナタさん？」
私はナルト君の手を掴み父上の元へ行った。

そして…ナルト君の中に封印されている九尾の狐の事を聞いた。
ナルト君は最初取り乱したが、私はそれを正した。
ナルト君はナルト君に代わりがないっと…

そして…私はナルト君と又修行を実施した。
今度は父上と一緒に…。

## RIDE．10　父上とナルト君

ナルト「僕の中に九尾の狐が入っていたから里中の人に毛嫌いされていたんだ！…でも…なんでヒナタさんは僕を毛嫌いしないのかなぁ…」
ナルト君が一人縁側で考えていた。
それを見た父上は声を掛けた。
父上「ナルト君…どうかしたのか？」
ナルト君は振り向き会釈をする。

ナルト君の隣に父上は座り話を聞いた。
父上「ナルト君？」
ナルト「ヒアシ様…どうして…ヒナタさんは僕を毛嫌いしないのですか？…僕は九尾の狐が封印されているのに…」
ナルト君は俯く。

父上「ヒナタがナルト君を毛嫌いしない理由か…簡単にいえば…ヒナタが自分でナルト君を日向の屋敷に一緒に住みたいと本心で決めたからでは？…あの子…ヒナタは今の日向　一族で一番しっかりとした意思を持っている子どもだ…たまになんだが…私はヒナタがまだ3つって言う事を忘れてしまう事がある…それは…父として…嬉しい半面…私が自分で情けなく思う…あの子…ヒナタはナルト君を…同情とか情けとかで助けたりはしない…ナルト君は…これから今以上に強い意思を持ち行動する事が出来ると…ヒナタも私も感じている」
ナルト「ヒアシ様…僕は…ヒナタさんみたいな人間になれますか？」
父上「なりたいと強く願い…それに向かってナルト君自身が進んでいけば…おのずと道は開いていくはずだ！…もし躓きそうになったら…私もヒナタもナルト君の力になろう！」

ナルト「ヒアシ様…ありがとうございます」
ナルト君は父上・ヒアシに頭を下げ礼を言った。
父上「いや…構わん」
そしてナルト君は翌日から修行に今まで以上に力をいれた。

## ＲＩＤＥ．１０．５　感想ご意見のお返事

この小説を書かせていただいているユンです。

感想ご意見のお返事をこの場を借りて…。

まず、雲隠れと木の葉は同盟を組んでいないのでは？
っと感想ご意見がありました。

私は「始まり」と言うタイトルの本文したの方に書きましたが、原作を壊すと書いていたと思います。
読んでいる方の感想ご意見を否定する気はございませんが、私は一応、文にて宣言しております！

感想ご意見を下さいました…Ａ様…この場からお返事を書いてしまいすみません…。
ただそう言った感想ご意見などは私のような初心者には嬉しいです…ありがとうございます。

又、何か感想ご意見を頂いた場合「２０．５」「３０．５」っと１０単位で書かせて頂きます。

ただ、誹謗中傷などは…おやめ下さい。

失礼いたします。

## RIDE．11　ヒナタ様とコウ

ナルト君が父上と話をしていたと言う事を私はコウから後で聞いた。
コウ「ヒナタ様…？」
ヒナタ「何？コウ？」
コウ「いえ…今更なのですが、何故、守護八卦六十四掌が出来たのですか？…なんかチャクラコントロールも…」
ヒナタ「コウ…私は日向　一族次期当主を目指しているのです！独自に修行していても可笑しく無いかと…」
コウ「ですが…守護八卦六十四掌は…まだ３つのヒナタ様には早すぎます！又何かヒナタ様にあったら…私は…」
ヒナタ「…コウ、ありがとうございます…では、約束しましょう？…わたしがもし中忍もしくはヒザシ叔父様と同じ上忍になったら…使わせて頂きます！」
コウ「っな！中忍、上忍…貴方は次期当主なのですよ！」
ヒナタ「コウ…この忍びの世界ではいつ何が変わるか分かりませんから…それに当主にはいつ引き継ぎがあるか…」
コウは私の言葉を聞き、まだ完璧に納得をしていない顔をしていたが、私が一度決めた事はガンとして覆さない事を世話役として知っていたので…聞き入れる事にしたようだ。

## ＲＩＤＥ．１２　ナルト君の誕生日と慰霊祭

ナルト君が日向の屋敷に来て２年の月日が経った。
毎年ナルト君の誕生日…１０月１０日は慰霊祭が行われていた。
九尾の狐が封印されているのをナルト君自身は知っているのでなるべく…その日は屋敷から出ず部屋の中で瞑想をしていたようだ。
ナルト「ヒナタさん！お帰りなさい！」
私が父上とコウと屋敷に帰ると玄関まで迎えに来てくれた。
ヒナタ「ナルト君、ただいま」
父上「ただいま」
コウ「…ただいま…ではヒアシ様、私は…」
父上「あぁ…」

ヒナタ「ナルト君、今日は何をされていたのですか？」
ナルト「部屋の中で瞑想をしていました！」
ヒナタ「ずっとですか？」
ナルト「はい！」
父上「ナルト君、今日は君の誕生日だ…部屋に篭らなくても良いんだよ」
ナルト「いえ…今日は九尾の狐の事件があった日です！…僕は里中の人たちにとって…災いですから」
ヒナタ「私はそうは思いませんよ？」
ナルト「で、でも！」
ヒナタ「ナルト君、私が貴方を日向の屋敷に一緒に暮らしている理由は…話しましたよね？」
ナルト「はい！」
ヒナタ「なら…災いとか言わないで下さい！」
ナルト「わ、分かりました…ヒナタさん」
父上「ナルト君、ヒナタ、食事にしよう」

父上の言葉に頷き、私たちは食事にした。
食事の最後にコウ、ヒザシ叔父様、ネジ兄様が来てナルト君へのケーキを出して一緒に食べた。

## ＲＩＤＥ．１３　アカデミーの入学説明会

ナルト君が来てから修行は…意外にも順調していた。
私は父上にアカデミーに二人入ると申し上げたら、父上はネジ兄様も一緒にと言い許可してくれた。

ナルト「アカデミー…だ、大丈夫ですかね？」
ヒナタ「ナルト君は何を心配されているのですか？」
ネジ「ナルト、俺とヒナタ様がついているんだから堂々としていろ！」
ネジ兄様はナルト君の肩に手を置き下を向いたナルト君を励ました。

ネジ兄様とナルト君とアカデミーの入学説明会に行った。
（これは生徒は行かなくても親が行けば良い説明会）
ナルト「ヒナタさん、ネジさん…なんか子どもの姿ありませんね？」
ナルト君は少し（大分）不安な様子で周りの大人たちを見ていた。
ヒナタ「まぁ…普通親が行けば良い説明会ですからね？」
ナルト「そ、そうなんですか？うぅ…」
ナルト君は私の言葉を聞いて不安な様子がよけい見て取れた。
ネジ「ヒナタ様も人が悪い（笑）ナルト、そんな事だからヒナタ様はナルトをからかうんだよ！」
ナルト「え？からかっていたんですか？」
ヒナタ「ネジ兄様、言ったらダメじゃ無いですか？」
ネジ「フフ…そうですか？」
ヒナタ「そうです！」
そんなやり取りをしていると後ろの方からナルト君の悪口が聞こえた。
私とネジ兄様はその方角に殺気を流すと悪口は止まった。
ナルト「ヒナタさん、ネジさん…ありがとうございます…」

ナルト君は小さな声でお礼を言って来た。

その数分後、三代目　火影様が来られて説明会が始まった。

## ＲＩＤＥ．１４　見守られている感覚

アカデミー入学説明会には何故か…秋道父、奈良父、山中父、犬塚母、うちは父、油女父…がいた。

まぁ…多分…イレギュラーな私がいるからでしょう！

説明会の帰り道、黙っている私にナルト君は小さな声で話し掛けた。

ナルト「ヒナタさん…？」

ヒナタ「ん？どうしたの？ナルト君？」

ナルト「なんか…考え事ですか？」

ヒナタ「いえ…まぁ…多分いつもの気のせいです！」

ナルト「そうですか？」

ネジ「ヒナタ様、何かありましたらご相談下さい！」

ヒナタ「ネジ兄様、ナルト君…ありがとうございます…」

私は二人に礼を言うと二人は恐縮していた。

私は見られている方角を見たが、誰の姿も確認できなかった。

ヒナタ「…気のせいだよね？」

そう言い屋敷に戻る道を歩いていった。

しかし、私の感覚は当たっていた事は又別の話。

## ＲＩＤＥ．１５　この小説を詠んで下さっている方々へ

この小説を詠んで下さり有り難うございます。

現在、この小説と平行して『日向の跡目（裏）』も書いています。

予定ではありますが、ＲＩＤＥ．２０あたりで二つの話を一つに纏める予定にしています。

多分、そのあたりで日向目線が違う主人公に変更する予定になっています。

日向目線を楽しみに詠んでいる方には申し訳在りませんがその事に対しご了承下さい。

また、『日向の跡目（裏）』を今更新していますので、現在更新率が遅いと思います。

申し訳在りません。

作者・ユン

## RIDE．16　アカデミー入学の準備

ヒナタ「ナルト君、ネジ兄様、早く行きましょ！」
ナルト「はい！」
ネジ「はい、ヒナタ様」
私とナルト君、ネジ兄様はアカデミー入学の準備で里の商店街にやって来た。

里の人「ねぇ…アレ」
里の人「なんであんなヤツが…」
商店街で店の前にいる里の人の陰口があからさまに聞こえた。

それを聞いたナルト君は下を向く。
ヒナタ「…ネジ兄様」
ネジ「あぁ…了解しました…ヒナタ様」
そう言うとネジ兄様はナルト君に耳打ちする。
ナルト「え？でも…」
ネジ「俺とヒナタ様が許可する」
ナルト「…わ、分かりました」
ナルト君は私とネジ兄様の顔を見て小さく頷く。
ナルト君は建物の間に入って行って…
ナルト「か、影分身の術」
ナルト君は5人になり私とネジ兄様の側にやっていた。
ナルト「早めに買いものをすませましょう？」
ネジ「あぁ…」
ヒナタ「宜しく」
そして、分身したナルト君のおかげで早く買いものを終えた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4486y/

日向の跡目

2011年11月20日18時08分発行